

保育現場における視覚支援のあり方に関する考察 —療育現場の実践をもとに—

Consideration of the state of visual support in childcare settings
Based on the practice of therapeutic education

工藤 絵里（函館大谷短期大学） Eri KUDO

要 約

保育現場では、障がいの有無に関わらず、同じ施設内で保育する統合保育が実施され、その中で、集団生活や一斉指導における困難さと支援方法への悩みといった問題に直面している。保育者は、クラスをまとめることに對して困難さを感じ、手探りで対処方法を考えている現場も多い。そして、子どもとの関わりの中で、保育者が気になる子どもの行動が存在し、特別な配慮が必要だと感じている保育者も多い。そこで本稿では、学校や支援施設などの実践現場で広く普及している視覚支援に着目し、療育現場での実践をもとに、保育現場における視覚支援の有効性と課題について考察した。

キーワード：視覚支援 保育 療育実践 保育者養成

1. 問題と目的

近年、通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査（文部科学省,2022）の結果では、学習面または行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒が約8.8%の割合であった。そのような状況において、保育現場では、いわゆる「気になる子ども」に対する理解と支援のあり方に関心が高まっている（日本保育協会,2016）。「気になる子ども」の行動上の問題として、対人関係の形成や集団活動への参加に困難が見られる事例が多く報告されている（細谷,2014）。

保育現場では、集団に入れない、指示が通らない、子ども同士のトラブルが頻回に起きるなど、保育者が気になる子どもの行動がある。気になる子どもの行動は、クラスあるいは園生活などの集団生活の中で他者との相互交渉に問題を抱えており、保育者は、集団生活や一斉指導における困難さと支援方法への悩みといった問題に直面している。保育者は、「個別の指導・支援」の必要性は理解できていても、集団指導の中でどのように実施すればよいのか困難さを感じていることも報告されている（吉兼・林,2010）。

学校や支援施設などの実践現場で広く普及し、保育現場でも多く活用されている視覚支援は、発達障害などにより言語の理解やコミュニケーションに困難がある場合でも、視覚で捉えることで理解しやすく、スケジュールの見通しがつくことで不安が和らぎ、自らの思いを他者に伝える有効な手段となっている。したがって、視覚支援は、語彙の少ない幼少期の子どもにも言語を補助する役割として有効である（平澤,2015）。

そこで、本稿では、療育現場の実践をもとに、保育現場における視覚支援のあり方について考察し、保育実践における視覚支援の課題を探っていくことを目的とする。

2. 対象と方法

2-1. 調査対象と調査方法

①調査対象は、H市の児童発達支援センターと放課後等デイサービスの2施設

②調査方法は、2024年8月にH市児童発達支援センターに見学を依頼する。本学のこども学科2年 福祉コース履修者2名と施設見学に行き、施設長より講話をいただく。療育現場で実践している視覚支援教材の写真撮影を依頼し、許可をいただいた。放課後等デイサービスは、写真撮影のみ許可をいただいた。

2-2. 倫理的配慮

研究目的を口頭と文書にて説明し、視覚支援教材の写真撮影を依頼した。写真は、研究成果として公表する可能性があること、調査を通して得た情報は、研究以外の目的で使用しないこと、施設情報保護のため施設名の特定がされないように配慮する旨を各施設に対して説明した。

3. 結果

3-1. 療育現場での視覚支援の実例

(1) 物の場所に関する視覚支援

余分な刺激をなくし、「その場で何を使うのか」「何を置くのか」を明確にしている。持ち物や玩具を片付ける場所が、ひと目でわかるようにすることが大切である。(写真1)は、物の収納場所を明確にしていることで、鉛筆、消しゴム、グリップの置き場所がわかりやすくなっている。(写真2)は、朝の準備として、連絡帳、シール帳、おしぼりをカバンから出し、所定のかごに入れる。所定の場所の写真が視覚の手がかりとなり、子どもたちは、最後まで自分で準備することができる。

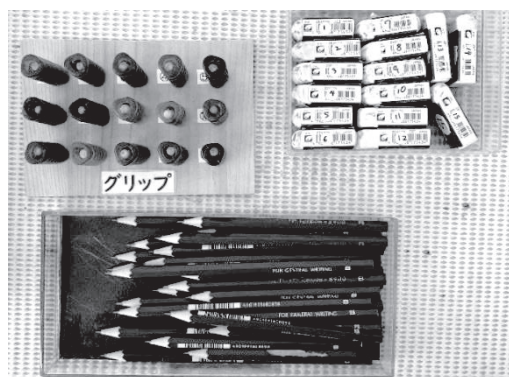


写真1：鉛筆、消しゴム、グリップの所定場所



写真2：連絡帳、シール帳、おしぼりの所定場所

(2) 時間に関する視覚支援

何をどの順序で行うか時間軸で示し、見通しを持たせる。子どもの理解レベルによって、実物、写真、絵、文字を使い分けてスケジュールを掲示し、子どもがそれを見て次の活動の準備を行う。

(写真3)は、絵カードと実物の写真を組み合わせて1日のスケジュールを掲示している。子どもの好きなキャラクターで興味を持たせ、活動のたびに上からカードを1枚ずつ剥がして、活動場所のカード入れまで持っていく。(写真4)は、「活動内容」と「はじめ」と「おわり」の時間が時計の針で示してある。活動が始まる時間になったら、「はじめ」の時計カードを持っていき、活動に取り組む。(写真5)は、その日のメインの活動と

給食、休日を週間スケジュールで掲示している。日にちと曜日の理解がある子どもにとっては、その日の活動や次の日の活動を確認して、次の日のモチベーションに繋げている。



写真3：絵カードと実物写真の組み合わせ

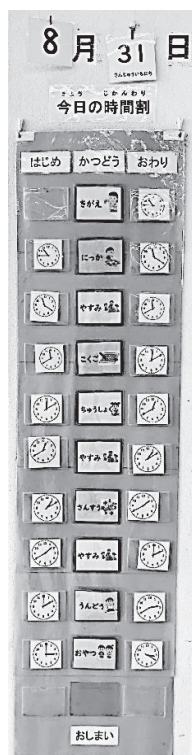


写真4：「はじめ」と「おわり」の時間を示したスケジュール



写真5：週間スケジュール

(3) 手順表

工程や手順をわかりやすくする。「どのような動きをして、次に何をするのか、いつ終わるのか。」がわかるように掲示してある。どの子が見ても理解できるように、文字だけでなく、絵や写真なども取り入れる。(写真6)は、めくり式の歯みがき手順表である。始まりから終わりまでを示している手順表では、やるべき工程に注目することが難しい子どもに対して、ひとつずつの工程が確認できるように工夫されている。(写真7)は、磨く部分を赤色で示し、「うえ」「した」と簡単に場所を示し、必要な情報のみで構成されている。(写真8)は、朝の準備の手順表である。文字の理解度が高い子どもに対して、見本の写真をつけることで子ども自身が確認できるように工夫されている。

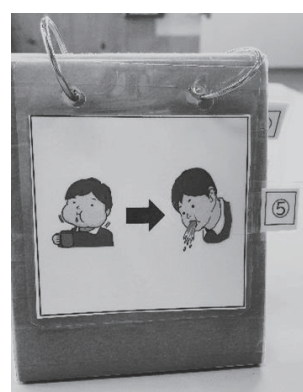


写真6：歯みがき用めくり式手順書

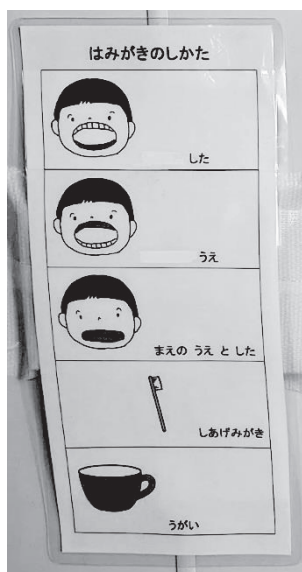


写真7：歯みがき手順書

てじゅんひょう		
1	くつを せんのなかに そろえる	
2	しょうどくを する	
3	かばんを ロッカーに しまう	
4	がくしゅうボックスにいれる ①えんぴつ 2ほん ②グリップ 1こ ③けしごむ 1こ	
5	グリップを つける	
6	がくしゅうボックスを つくえに いれる	
7	てじゅんひょうをせんせいにわたす 「おわりました!」	

写真8：朝の準備手順書

(4) 行動や指示を伝える

絵や写真、実物などの視覚情報で行動や指示を伝える。聞くよりも見て理解する方が得意な子も多い。思い出して行動できるような掲示や自分の意思を発信できる絵カードなどでも有効である。(写真9)は、紙ごみを小さくして捨てることを提示している。また、その提示の中にある「1まいずつ たいせつに つかおう」は、一度に何枚もペーパーを使ってしまう子どもに向けた注意喚起である。(写真10)は、排煙窓のスイッチがあり、そのスイッチを触る子どもが頻繁にいたためカバーを設置した。禁止マークを示したことで、触ることがなくなっている。(写真11)は、文字とイラストを使って「今日はボールを使って遊べる」ことを示している。文字とイラストを使用し、誰が見てもわかるように掲示してある。



写真9：ペーパーに関する注意喚起



写真10：禁止マーク

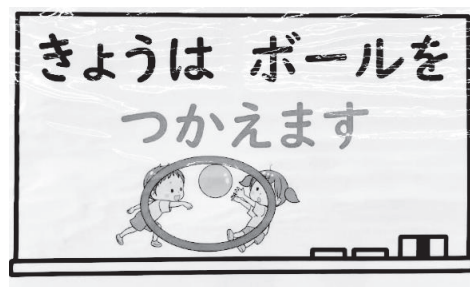


写真11：使用できる遊び道具のお知らせ

4. 考察

4-1. 保育現場での視覚支援の有効性

保育現場における視覚支援は、特に発達障害やコミュニケーションに課題を持つ子どもたちに対して非常に有効な支援方法である（平澤,2015）。視覚支援は、子どもたちが環境や活動を理解しやすくするために、絵カード、スケジュールボード、ピクトグラムなどを使用し、視覚的な手がかりを提供することである（松下, 2018）。視覚支援の有効性は、特に次のような点である。

(1) 活動の予測と安心感の提供

視覚支援を活用することで、子どもたちは今後の活動やその順番を予想することができる。特に、保育現場では日々の活動に変化が多く、子どもにとっては予測できない状況がストレスや不安を引き起こすことが考えられる。視覚的なスケジュールや絵カードを使用することにより、子どもたちは次に何をするのかを確認でき、安心感を持つことができる。例えば、絵カードの時間割を使って、「本日の活動内容」や「給食」「おひるね」「帰りの時間」などの活動を示すことで、子どもたちは次に行うべきことを理解し、過度な不安や混乱を避けることができる。視覚支援は、子どもたちが「今やるべきこと」と「次に来ること」を明確に理解できるため、時間の経過や活動の流れに対しての適応力を高めると考える。

(2) コミュニケーションの促進

視覚支援は、言語表出に困難のある子どもに対するコミュニケーション支援の方法として用いられることがある（松下,2018）。絵カードやピクトグラムを使うことで、子どもは視覚的に支持を受け取り、理解しやすくなる。発達障害の子どもや自閉スペクトラム症(ASD)の子どもたちには、言葉よりも視覚的な手がかりの方が理解しやすい場合がある。例えば、食事の時間やトイレに行くタイミングなどを示す絵カードを使用することで、言葉を使わずに自分の意思を伝えたり、他者の支持を理解したりすることができるようになる。コミュニケーションが図りやすくなり、言葉での指示が難しい子どもや発語が遅れている子どもにとって、視覚的な情報は強力な手段となる。これにより、子どもたちの社会的な孤立感を減少させることにつながると考える。

(3) 社会的スキルの向上

視覚的に示された社会的なルールや行動マナーは、子どもたちが社会的な状況を理解し、適切に行動する手助けとなる（松下,2018）。これにより、子どもたちは他者との関わりを学び、協調性や共感力を育むことができる。例えば、社会的な場面で「順番を待つ」や「友だちと一緒にあそぶ」といったルールを絵カードなどで示すことで、子どもたちは、ルールを視覚的に理解しやすくなる。視覚支援を使うことで、遊びの中での適切な行動や反応を学ぶことができ、集団生活における社会的スキルを向上させることができると考える。

(4) 自己管理能力の向上

子どもたちが自分自身の行動を管理する力を育むことにも役立つ（松下,2018）。視覚スケジュールや行動カードを使うことで、子どもたちは、自分の行動を自発的に確認し、実行することができるようになる。例えば、お片付けの時間やトイレに行く時間、休憩の時間などを視覚的に示すことで、子どもは自分のペースで活動を進めることができる。また、視覚支援によって、子どもたちは「何をすべきか」「次に何をすべきか」を理解することができ、自立性が高まることで、保育者の支持を待たずに自分から行動を起こすことに繋がることも考えられる。

(5) 環境への適応

新しい環境や状況に対して敏感な子どもにとっては、視覚的な手がかりを用いることで、環境の変化をスムーズに受け入れやすくなる（平澤,2015）。例えば、新しい教室への移動や新しい活動の開始時に、視覚的なガイドが提供されることで、子どもたちは前もって心の準備ができ、新しい環境に適応することができる。と考える。

る。

4-2.保育実践における視覚支援の課題

視覚支援が有効である一方で、すべての子どもが適応できるわけではない。特に、視覚的な情報に対して過敏な子どもや、視覚支援を取り入れることで逆に混乱を招いてしまう場合もある。視覚支援は、視覚を中心に行われるため、視覚的手がかりに依存しすぎると、他の感覚を使った学習が抑制されてしまう可能性がある(阿部・佐藤,2018)。例えば、視覚的なスケジュールが不適切なタイミングで表示されたり、視覚的に多くの情報を一度に与えてしまうことで、子どもは過剰な刺激を受け取り、混乱を招いてしまうことも考えられる。

さらに、個々の子どもの発達段階や認知特性に応じて、視覚支援をどのように調整するかが重要になってくる。言語能力が低い子どもには、絵カードやイラストを使うことが効果的であるが、他の子どもには単純すぎて無関心になってしまうこともある。また、平澤(2015)は、絵カードやイラストを使う支援は、保育者との信頼関係が大きく左右していると述べている。個別のニーズに応じた内容が求められるため、全員に一律の方法で支援することは難しい現実がある。

視覚支援に頼りすぎると、子どもが自らの判断や問題解決能力を発展させる機会が失われてしまう可能性も考えられる。視覚支援はあくまで補助的なツールであり、最終的には言語や社会的な相互作用を通じて学びを深めていくことが重要である(阿部・佐藤,2018)。視覚支援がないと不安を感じてしまう子どもに対しては、徐々に依存を減らして、他の手段で自信を持てるように工夫することが必要であると考えられる。例えば、課題を少しずつ小分けにして、達成感を味わわせながら成功体験を増やしていく取り組みや子どもの好きな触感を伴う教材を使用するなど、子どもが安心感をもって活動できるようにサポートすることが必要であると考えられる。

視覚支援の使用が過剰になった場合、視覚的な情報が多すぎて逆に子どもにとって強い刺激となってしまうことがある。保育環境においては、あまりに多くの視覚的手がかりが存在すると、情報に圧倒され、何に注意を向けるべきかわからなくなることがある。特に、色やデザインが派手すぎるカードや絵を多用すると、本来見てほしい活動内容に注目できなくなる。保育者側が興味を引きつけるように工夫する必要はなく、たとえ無機質でシンプルなものであっても、支援ツールとして機能する教材を作成することが必要である(松下,2018)。

視覚支援を実践に取り入れるためには、継続的な管理と更新が必要である。例えば、活動やルールが変更されるたびに、視覚的なスケジュールや指示をその都度更新し、子どもたちに分かりやすく伝える必要がある。また、視覚支援の道具が壊れたり、紛失したりすることもあるため、常に常備し、適切に管理することが求められる。子どもによっては、絵カード等を口に入れたり、顔の近くで見たりすることがあるので、危険がないように配慮することが必要である(松下,2018)。

さらに、保育者自身の視覚支援に関する理解と訓練も重要になってくるのではないだろうか。保育者が視覚支援の目的と方法を理解し、子どもたちに効果的に使えるようになるには、計画的な研修や経験が必要になってくる。そのためには、日々の業務に追われている保育者がゆとりをもって研修を受けられるシステム作りや巡回相談員や特別支援コーディネーターなどの専門家チームとどのように連携していくのが重要な課題と考える。

5. おわりに

保育現場における視覚支援は、子どもたちがより安心して活動に参加し、社会的スキルを学び、自己管理能力を育むために非常に有効である。特に、発達に課題がある子どもに対して、視覚支援は理解の助けとなり、コミュニケーションの橋渡しをし、自己表現を促進することができる。と考える。

視覚支援は、「子どもを動かしやすくすること」ではなく、「子どもが納得して、自ら動けるようになること」で

あり、保育者と子ども、または子ども同士の相互作用を円滑にし、学びの環境をより良いものにするための重要なツールである。保育現場において非常に効果的な支援方法である一方で、その使用には課題も多くある。個別のニーズに対応する柔軟さや過度な依存を防ぐ工夫、視覚的刺激の適切な量の管理などが求められる。視覚支援を効果的に活用するためには、その子どもの特性を理解し、支援方法を調整することが不可欠である。また、保育者が視覚支援を適切に運用できるように、継続的な学びと実践が重要であると考えられる。

6. 謝辞

本調査にご協力賜りましたH市児童発達支援センター、放課後等デイサービス職員の方々に心より御礼申し上げます。

7. 文献

- 阿部敬信・佐藤真央（2018）幼児教育における特別な支援が必要な子どもの理解と指導. 別府大学短期大学部紀要, 37, 29-39.
- 高木芳子（2021）「気になる子ども」に関する研究動向. 人間発達学研究, 12, 103-111.
- 竹内貞一・坪井寿子・藤後悦子・府川昭世・田中マユミ・佐々木圭子（2010）保育園における「気になる子ども」の現状と支援の課題. 東京未来大学研究紀要, 3, 77-83.
- 土橋久美子（2017）「特別な配慮を要する幼児」に対する保育のあり方について. 白百合女子大学初等教育学科紀要, 1, 53-60.
- 日本保育協会（2016）社会福祉法人日本保育協会, 保育所における障害児やいわゆる「気になる子」等の受け入れ実態, 障害児保育等のその支援内容, 居宅訪問型保育の利用実態に関する調査研究報告書
- 原口英之・野呂文行・神山勉（2015）幼稚園における特別な配慮を要する子どもへの支援の実態と課題. 障害科学研究, 39, 27-35.
- 平澤節子（2015）保育現場における視覚支援教材の活用について. 児童文化研究所所報, 37, 89-97.
- 細谷一博（2014）保育者が感じる『気になる』子どもの行動特性に関する研究調査. 日本保育学会第67回大会発表論文集, P142064C.
- 北海道教育大学函館校 国際地域研究編集委員会編（2022）国際地域研究IV. 大学教育出版, 132-138.
- 松下浩之（2018）知的障害や自閉スペクトラム障害のある人に対する視覚刺激を用いた支援の効果. 山梨障害児教育学研究紀要, 12, 117-129.
- 文部科学省ホームページ「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」：https://www.mext.go.jp/content/20230524-mext-tokubetu01-000026255_01.pdf（2024年12月15日閲覧）
- 吉兼伸子・林隆（2010）特別支援教育時代における保育士の業務上の保育困難感について. 山梨県立大学学術情報, 3, 81-87.

8. 付記

本稿は、はこだて高等教育機関合同研究発表会 HAKODATEアカデミックリンク2024「保育現場における視覚支援の在り方～療育現場の実践をもとに考える～」にてポスター発表した原稿をもとに、筆者が加筆、修正及び再構成したものである。

